

第Ⅴ章 遺構・遺物の検討

第1節 中河内沖積地における縄文時代後・晩期の状況

渡 辺 昌 宏

本節では本遺跡出土資料を含めて、中河内地域の沖積地⁽¹⁾における縄文時代後・晩期の状況を説明したい。またそこに内在する問題点を整理し、今後の研究課題を明確化することに目的を置いた。なお出土状態の所見については、小野久隆、岡本敏行の両氏より教示を受けた。

1. 美園遺跡出土資料

すでに本書第Ⅳ章第2節第1項において述べているが、B、D、Fの各地区より検出されている。

(1)B地区

- ・後期：弥生時代前期後半の包含層及びその上層に堆積した砂層中から合計2片の土器が出土した(第393図2・3)。いずれも表面が摩滅しており、自然河川等によって上流から運ばれてきた可能性が大きい。2の土器は北白川上層1式の深鉢形土器口縁部破片に相当する⁽²⁾と考えられ、3は北白川上層1式ないし2式の深鉢⁽³⁾あるいは鉢形の体部破片であろう。
- ・晩期：弥生時代前期後半の包含層中から、混在した状態で深鉢形土器等の破片が5点出土している(本書第430図)。いずれも船橋式の新段階に属するものであった。⁽⁴⁾

(2)D地区

北端部に位置する自然河川(DNR101)の砂層中より、おそらく深鉢形土器の体部破片と思われる資料が1点出土している。時期については判断が難しいが、後期ないし晩期に属するものであろう。

(3)F地区

FNR102(南北方向で幅約18.5m、深さ約1m)より、後期前葉と晩期前葉の土器が数点確認されている。

- ・後期：第393図の1は浅鉢形土器口縁部破片であり、橋状把手が観察される。北白川上層1式に含めて考えたい。表面が摩滅しており、上流から運ばれてきたものであろう。
- ・晩期：第393図9はFNR102の上層から置かれたような状態で検出された。表面はほとんど摩滅しておらず、体部下半には煤が付着していた。滋賀里式⁽⁵⁾の深鉢形土器で、底部を欠損した約半分ほどの大形破片である。また生駒西麓産の胎土であった。10と11も滋賀里式の深鉢形土器体部破片であり、表面の摩滅が見られない。

本遺跡の場合は、後世の包含層及び自然河川中から資料が検出された。後期前葉の土器は摩滅

しており、自然河川によって運搬された資料である。晩期前葉の土器は、主に FNR102 から検出された。自然河川の上部から出土したにもかかわらず、原位置を止めるような状態で見つっている。このことは FNR102 が形成した微高地に生活面が存在した可能性を暗示しており、周辺にこの時期の集落が営まれていたと思われる。最近の調査で、中河内地域の沖積地から縄文時代後・晩期を中心とする資料が確認されており、これらは自然河川に伴って検出される例が多い。⁽⁷⁾ 自然河川が埋没後に形成した微高地を利用して、集落が営まれる例がかなりあるのではなかろうか。本遺跡 F 地区の状況も、それを物語る証であろう。

2. 縄文時代後・晩期の遺跡立地 (第392図)

この地域の古地形復原については、早くから研究が行なわれてきた。⁽⁸⁾ その結果、河内湾から河内湖への変遷及び各時代の汀線が想定されている。近年この地域を南北方向に縦断する大調査が実施され、本遺跡を含む各遺跡の縄文時代後・晩期の地形環境が解明されつつある。⁽⁹⁾

山賀遺跡の調査によって検出された 3 層の黒色粘土層が、鍵層としての役割をある程度果たすのではないかと考えられた。⁽¹¹⁾ しかし本遺跡の状況とは必ずしも一致せず、今後より広い地域で事実の蓄積とその検討作業を必要としている。⁽¹²⁾ また本遺跡の調査結果から当時の自然河川の状況には 2 種類あることが明らかとなった。つまり川幅が比較的狭いにもかかわらず深く挟る川と、川幅が広くて浅い流れをもつ川である。⁽¹³⁾ このことは時期によって、流量及び流速に変化があったことを証明している。原因としては種々考えられるが、下流の河内湾(潟)の汀線位置と降水量の関係が注目される。単に海進・海退作用だけではなく、上流からの沖積作用が微妙に働いているようである。⁽¹⁴⁾ 地形的にも広範囲な変化ではなく、小規模な変化が累積されていた可能性の方が大きい。⁽¹⁵⁾

以上の観点に立てば、中河内地域の沖積地でも縄文時代後・晩期の段階に集落立地を可能にする土地がかなり存在したと想像される。その場所は、自然河川が埋没後に形成した微高地ではなかったろうか。

3. 各遺跡の状況

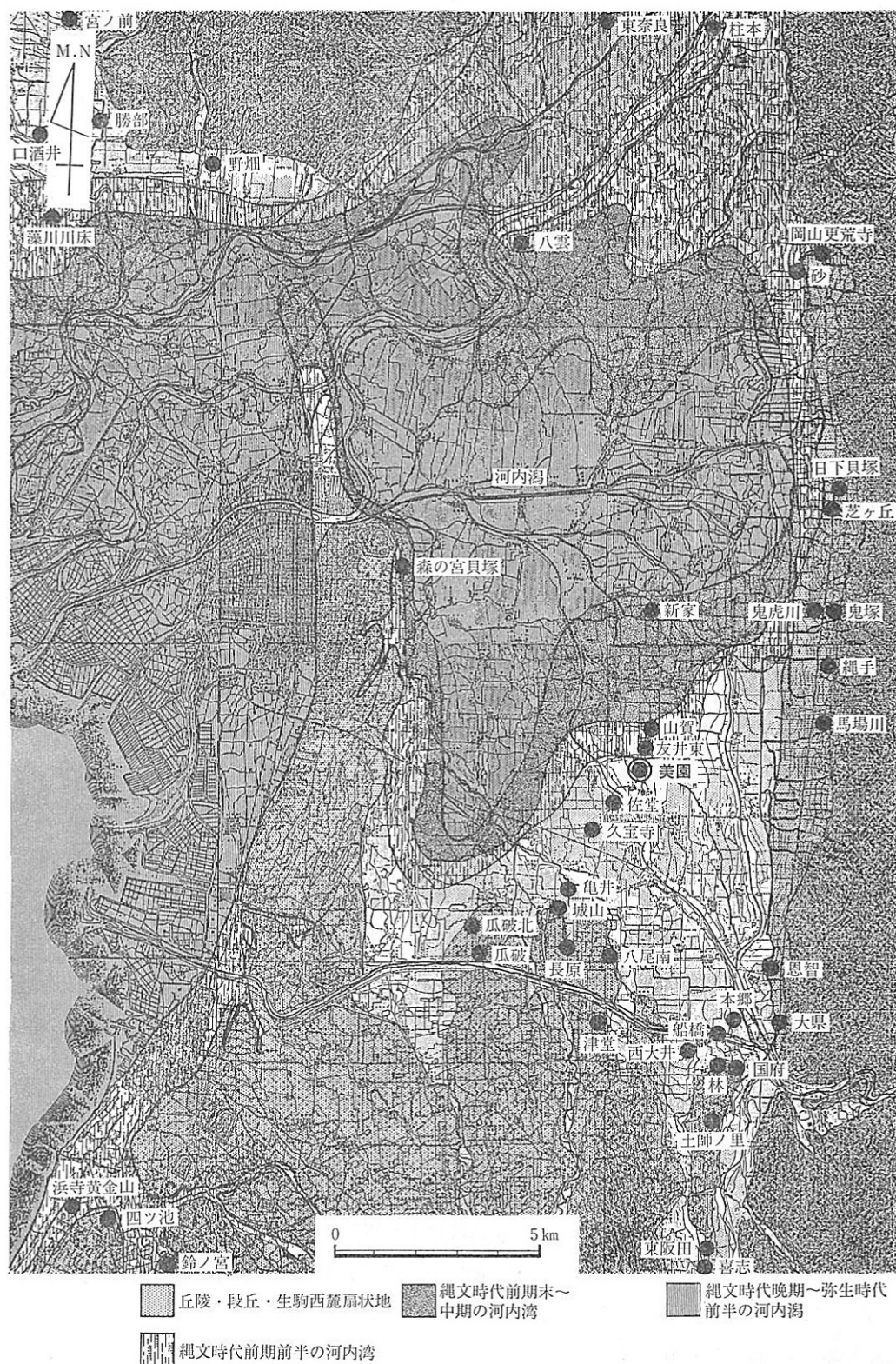
近畿自動車道関係の調査を中心に、中河内沖積地では 8 ケ所 (美園遺跡も含む) の遺跡が明らかとなった (第392図)。以下各遺跡の状況を概略的に述べてみたい。

新家遺跡⁽¹⁶⁾ (第393図17・18)

第Ⅱ層 (暗灰色粘土混粗砂) 上面から、滋賀里Ⅲ式の深鉢形土器が出土している。⁽¹⁷⁾ 第Ⅱ層は自然河川の堆積層である可能性が強く、その微高地上に生活面が存在したのではなかろうか。晩期中葉には、かなり河内湾に接近していたと考えられる新家遺跡にも人々が生活を始めている。

若江北遺跡⁽¹⁹⁾ (第393図15・16・21)

弥生時代前期の溝、弥生時代前期から中期の水田耕土内等の後世遺構に伴って出土した。土器は摩滅しており、流入した資料と言える。後期前葉と晩期の滋賀里式、船橋式の新段階の時期に属する土器がそれぞれ認められた。原位置に近い出土を示す資料がないため判断できないが、少



第392図 縄文時代後期～晩期の主要遺跡の分布図⁽⁸⁾

なくとも晩期前葉には近接して集落等の存在する可能性が大きい。

山賀遺跡⁽²⁰⁾ (第393図 4・6～8・12～14・19)

遺跡の南半部を中心に北白川上層2式⁽²¹⁾(4)、北白川上層3式⁽²²⁾(6)、宮滝式⁽²²⁾(7)、滋賀里式(12～14)、船橋式新段階(19)の各時期に属する土器が検出された。その他木製容器、杭なども一緒に見つっている。これらはほとんどが数本の自然河川中から認められており、出土状況の点では美園遺跡FNR102の状況と類似していた。後期に属する資料には摩滅が見られたが、晩期のものは摩滅しておらず、その点も美園遺跡と共通する。また滋賀里式に属する資料が最も多く確認された。その他川床面より人と鹿の足跡も多数見つっている。以上の事実から山賀遺跡においては、自然河川の形成した微高地上に立地する集落が晩期初頭の段階で出現する可能性が大きい。多くの点で美園遺跡と類似していた。

友井東遺跡⁽²³⁾

山賀遺跡と美園遺跡の間に位置しており、弥生時代中期の自然河川及び包含層中より船橋式土器の深鉢形土器破片が出土している。これらはほとんど摩滅しており、二次的な堆積を示すと考えられる。

佐堂遺跡⁽²⁴⁾

D地区の切り広げ部分より、溝覆土及び包含層中で船橋式新段階の深鉢形土器と畿内第Ⅰ様式中段階小形壺形土器(生駒西麓産)が共伴した状態で検出された。佐堂遺跡の南西に隣接する久宝寺遺跡においても同様な出土状態を示しており、堅穴住居跡等の明確な遺構は認められないが両者一体となって集落を形成している可能性が強い。先述の溝がこの時期に伴うとすれば、貴重な遺構である。

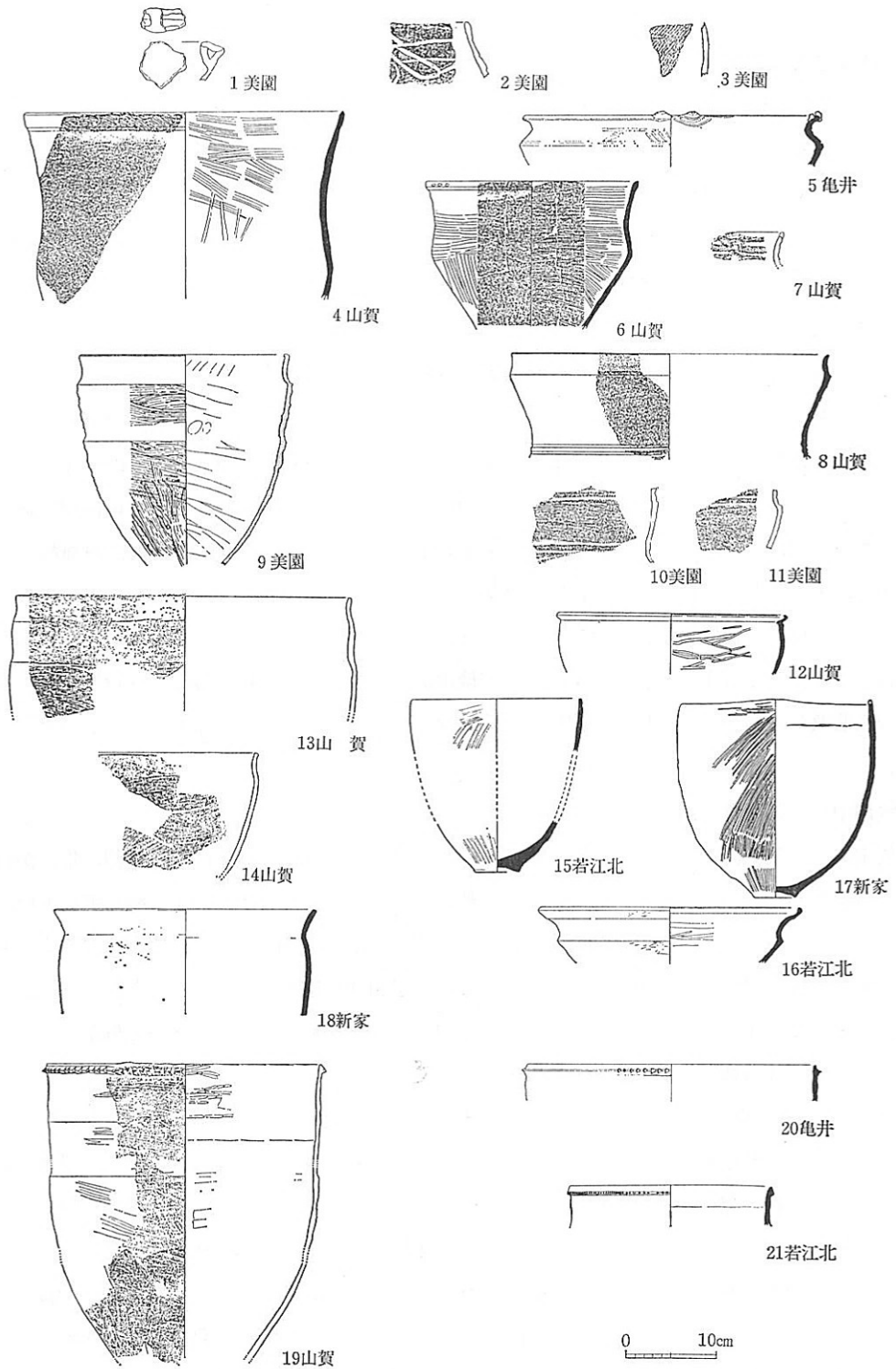
久宝寺遺跡

・北地区Aトレンチ⁽²⁵⁾——自然河川及びその上層に堆積するシルト層中から船橋式の古・新段階の土器が多数確認された。またこれに伴って畿内第Ⅰ様式中段階の壺形土器(非生駒西麓産)も出土している。その他サヌカイトの剥片、石核状の大形剥片、石器等が検出されている。船橋式新段階の深鉢形土器に靱痕が付いたものも認められた。遺構は認められなかったが、かなり広範囲に多量の破片が見つっている点から考えて、自然河川の形成した微高地上に立地する集落になるのではなかろうか。近年船橋式新段階と畿内第Ⅰ様式中段階の共伴する例が、中河内地域を中心に増加している⁽²⁶⁾。いずれも共伴する畿内第Ⅰ様式中段階の土器は壺形土器が多かった。

・南地区A・B・Cトレンチ⁽²⁷⁾——数本の自然河川が検出されており、その中からは後期から晩期にかけての土器が多量に見つっている。主に晩期中葉以降の資料が多いが、後期中葉の土器も認められた。自然河川が形成した微高地上に後期中葉頃から生活が営まれるようであり、周辺に集落の存在する可能性が極めて大きい。

亀井遺跡⁽²⁹⁾ (第393図 5・20)

北白川上層2式ないし3式に属すると考えられる浅鉢形土器と船橋式新段階の深鉢形土器が検



第393図 中河内沖積地出土縄文時代後・晩期の土器

出された。小破片であり、なおかつ出土量が少ないため不明瞭な点が多いが、後期前葉から中葉にかけての集落が近くにあるのではなかろうか。

4. 今後の研究課題

以下に述べる4つの課題が残されている。

(1) 集落の確認作業

遺跡立地の点から見れば、自然河川の形成した微高地上で集落の営みは十分可能であったと思われる。遺物の出土状態も間接的ながらそれを暗示していた。しかしながら竪穴住居跡等の遺構を伴った明確な集落の確認が不十分であり、その究明が残されている。

(2) 生業形態と領域の解明

この地域に生活していた集団の生業形態の特色を明らかにする必要がある。残念ながら今のところそれを解明できる資料は見つかっていない。領域の問題としては、生駒西麓の扇状地に立地する遺跡との関係があげられる。土器の胎土においては、かなり生駒西麓産のものが入っているが全てではない。晩期にはそのほとんどが生駒西麓産で占められる。しかしながら後期中葉以降は、沖積地側に領域をもつ集団が現われる可能性が考えられよう。当時の沖積地は湿地帯が多く生活に適さないと考えられてきたが、自然堤防及び微高地がかなり広がっていたと推定される。同時にそこは植物質食糧、獣、魚類の宝庫であり、ここを領域として占有する集団が出現しても不思議ではない。また生駒西麓側の集団とも密接な関係にあったと想定される。各時期における領域の範囲及びその交流を通して、沖積地部分の地域性が発生する過程を探究することが重要である。

(3) 後期中葉から末葉にかけての画期

久宝寺、美園、山賀の各遺跡における所見から、早ければ後期中葉には沖積地側に集落が営まれる可能性が大きい。このことは地形的な条件に左右されるだけでなく、集団内部にも原因があるのではなかろうか。土器から見れば、この時期を境として近畿地方の独自性が強まりを示す⁽³⁰⁾。発見される遺跡の数が少ないためあくまでも仮説の域を出ないが、この時期以降近畿全体で人口が増加するのではなかろうか。大形竪穴住居跡もこの時期に見つかっている例が多い⁽³¹⁾。その結果として、沖積地へ集落が進出するとも考えられる。

(4) 縄文時代終末期の状況

近年縄文時代晩期末の問題が再検討されつつある。それは船橋式の細分を含めた、縄文時代の終末と弥生時代の開始に関する地域的なあり方に対してである。先述したように中河内地域を中心に数ヶ所の遺跡で船橋式新段階の土器と畿内第Ⅰ様式中段階の土器が共伴して認められた。これに対して山賀遺跡⁽³²⁾においては、それらの共伴が確認されていない。しかしながら、近接した地点で船橋式新段階の土器がまとまって出土している⁽³³⁾。このことは弥生文化を最初に受容した集落が、縄文時代晩期末の段階においてもそれぞれの地域にあって中心的位置を占めていた可能性が大きい。土器の型式学的な研究も大切であるが、各地域ごとの遺跡の特徴を明確に把握すること

の方がより重要である。同時に個々の遺跡におけるあり方の違いを抽出し、それを比較する作業を続けていく必要があろう。縄文時代の最終末期は決して一様な終り方を示すものではなく、各地域、各遺跡ごとの差異を有していると考えられる。その解明を通して、中河内沖積地に立地する遺跡の地域的特質を具体化することが今後の課題である。

註(1) 生駒西麓扇状地及び羽曳野丘陵先端部を除く、河内平野低地部を指す。

(2) 渡辺昌宏「淡輪遺跡発掘調査概要Ⅲ」大阪府教育委員会 1981年。

〃 「縄文時代の淡輪」『摂河泉文化資料』第32号 1983年。

(3) 註(2)文献参照。

(4) 従来船橋式には新旧の存在することが指摘されていた。近年長原式と呼ばれているものとはほぼ同様であるが、筆者としては長原式概念が確定するまではこのように呼称したい。

(5) 坪井清足「縄文文化論」『日本歴史1』岩波書店 1962年。

(6) 自然河川の堆積作用によって川床面が上昇し、天井川化する。その後で流路が変わると旧河道部分が盛り上った微高地を形成し所謂自然堤防となる。美園遺跡の場合は、B地区弥生時代前期後半の集落とC・D地区の弥生時代中期後半の集落がそれぞれこの上に立地していた。

(7) 山賀遺跡(中西靖人他『山賀(その3)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター1984年、生田維道編『山賀(その4)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター1983年)や久宝寺遺跡(寺川史郎氏、今村道雄氏、松岡良憲氏の御教示による。)があげられる。

(8) 梶山彦太郎、市原実「大阪平野の発達史」『地質学論集第7号』1972年。

(9) 大阪府教育委員会と(財)大阪文化財センターが実施している「近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う調査」を指す。

(10) 寺川史郎・尾谷雅彦編『亀井・城山』(財)大阪文化財センター 1980年。

(11) 中西靖人他『山賀(その3)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984年。

生田維道編『山賀(その4)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1983年。

(12) 山賀遺跡の場合、下層から順に第1～第3までの黒色粘土層が検出されている。本遺跡の場合、山賀の第2黒色粘土層と第3黒色粘土層に相当する層が検出された。山賀の第2黒色粘土は晩期前半に比定しているが、本遺跡ではFNR102の所見より晩期初頭以前に相当する。また第1黒色粘土は、山賀遺跡で晩期後半に比定しているが、本遺跡C地区では弥生時代前期前半の遺物包含層を形成していた。

(13) 前者は晩期前葉のFNR102であり、後者はB地区弥生時代前期遺構面を形成する晩期末の自然河川。

(14) 美園遺跡と山賀遺跡の違いを見ても海進、海退現象を含めて河内平野一帯が一様に水没する状況が、縄文時代後・晩期に繰り返したとは考えられない。

(15) 自然河川の堆積作用及び流路の移動に伴う後背湿地の変化等が、比較的大きな河川の流域単位で発生していたと思われる。

(16) ①石神幸子「河内平野の縄文時代」『河内平野を掘る』(財)大阪文化財センター 1981年。

②村上年生編『新家(その2)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984年。

- (17) 註⑩②文献参照。
- (18) 田辺昭三・加藤修編『湖西線関係遺跡調査報告書』湖西線関係遺跡発掘調査団 1973年。
- (19) 中井貞夫他『若江北』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1983年。
- (20) 註⑪文献参照。
- (21) 註⑫文献参照。
- (22) 末永雅雄『宮滝の遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書 1944年。
- (23) 亀島重則氏の御教示による。
- (24) 枅本哲氏、森屋直樹氏の御教示による。
- (25) 寺川史郎氏の御教示による。
- (26) 佐堂遺跡、久宝寺遺跡以外にも 東大阪市鬼虎川遺跡西端部貝塚(阿部嗣治氏の御教示による。)でも確認された。鬼虎川遺跡の場合は、セタシジミを主とする貝塚に伴って両者の土器が見つかるている。
- (27) 今村道雄氏、松岡良恵氏の御教示による。
- (28) Aトレンチの川は幅約40m、Bトレンチ幅約100m、Dトレンチでは幅が10~15mの自然河川がそれぞれ見つかった。
- (29) 註⑩文献参照。
- (30) 一乗寺KI式以降、土器の文様に見られる類似性が近畿地方一帯で強く認められ、瀬戸内地方東部へ影響を与えるようである。
- (31) 大阪府岬町淡輪遺跡(註⑫文献参照)や京都府城陽市森山遺跡(「1 森山遺跡発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書第6集』城陽市教育委員会 1977年)等で北白川上層3式から宮滝式にかけての大形堅穴住居跡が確認されている。
- (32) 註⑪文献参照。
- (33) 生田維道編『山賀(その4)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1983年。